「特集・九州の風土とランドスケープ」

緑の国際文化都市を目指して

— 福岡市における街づくり —

三 浦 明 義*・真 隅 潔**

Fukuoka City— Creating an International Cultural City full of Greenery

Akiyoshi MIURA・Kiyoshi MASUMI

1 福岡市の都市像

福岡市は、恵まれた自然と豊かな歴史に育まれた都市である。この地では有史以前から大陸との交流が始まった。日本の稲作の原点と評価される板付遺跡、西暦57年に後漢の光武帝が奴国王に授けたとされる「金印」、平安時代のはじめ、海外からの使節をもてなすための迎賓館として建てられた鴻臚館などの発掘は、福岡が古来から大陸文化の接点として日本文化の形成に重要な役割をはたしてきたことを証明している。

中世には対外貿易の拠点として、個性豊かな自由都市であった博多と、1600年以降に黒田藩の城下町として栄えた福岡が合体して、明治22年(1889)に市制施行したのが福岡市である。

市制施行当時は、人口5万人、面積5km²で出発したが、今日では、人口127万人、面積338km²となり、経済、行政、情報、教育、文化などの広域的な都市機能の集積とともに、地方中枢都市として発展してきた。

また、福岡市は、長い歴史のなかで、自由な気風、独自の文化をつくりあげてきた。それは今なお市民に受け継がれている。全国的に有名な祭りとして「どんたく」と「博多祇園山笠」があげられるが、これらはそのような自由闊達な市民の気風を如実に物語っている。

福岡市は、今、都市創りの方向として次の大きな4つの目標をかかげている。

- 1 自律し優しさを共有する市民の都市
- 2 自然を生かす快適な生活の都市
- 3 海と歴史を抱いた文化の都市
- 4 活力あるアジアの拠点都市

「自律し優しさを共有する市民の都市」とは、市民一人ひとりが地域社会を愛する心を持ち、まちづくりへの参加など、あらゆる機会を通じて生きがいと希望をもって生活できる都市づくりを目指すことである。

「自然を生かす快適な生活の都市」とは、恵まれた自

然を生かし、緑や水辺を生かした快適な都市空間と住環境を創造しながら、常に、自然と都市活動との調和を求め、すべての市民が安全で快適に生活できる都市を目指すことである。

福岡市は有史以前から対外交流の歴史を有する博多湾をシンボルとして抱いている。「海と歴史を抱いた文化の都市」とは、海にイメージされる福岡の風土、長い歴史に培われた自由な気風、独自の文化を受け継ぎ、常に多様な創造性を持ち続ける文化の都市を目指すことである。

「活力あるアジアの拠点都市」とは、国際化の潮流の中で、特に地域的にも歴史的にもつながりの深い、アジアとの交流を強め、美しく、個性豊かな都市を基盤に、アジアの交流拠点都市を目指すことである。

福岡市が九州全体の発展のために果たす役割はますます重要性を増しており、次の世代へ、住みやすい九州を引き継いでゆくため、国際化、情報化、高齢化及び、地方分権の新たな潮流の中で、多くの地域、多くの国々との連携を深めながら、風土と歴史に根ざした市民の都市づくりを推進することが、福岡市に求められている。

2 福岡市における公園・緑化行政の沿革

福岡市における公園・緑化行政の歴史は、大きな流れとしては、全国の主要都市のそれと同様である。

即ち、草創期としては、明治6年の太政官布達第16号によって指定され、明治9年(1876)に開園した東公園に始まり、以来、昭和初期にかけて、大濠公園など数箇所の主要な公園が誕生した。

戦後の公園整備は、戦災復興土地地区画整理事業が基礎となったが、特筆すべきは、昭和23年(1948)の第3回国民体育大会の会場として整備した、舞鶴公園の誕生である。本公園は福岡城跡にあり、西鉄ライオンズで有名になった平和台野球場、朝日国際マラソンの平和台陸

*福岡市都市整備局公園緑地部(部長) **福岡市都市整備局公園緑地部緑地課

上競技場など、歴史とスポーツが調和した公園として、また、隣接する大濠公園と一体となった福岡市の中心部に位置するシンボリックな公園として、市民に親しまれ続けている。

また、昭和30年代に入ると昭和31年（1956）に都市公園法が施行され、昭和33年には福岡市公園条例を施行することで、本格的な公園整備が始まるとともに、昭和33年から35年にかけては、市街地緑化事業として、5000本の街路樹を整備し、道路緑化の骨格を形成した。

しかし同時に、昭和30年代から昭和40年代にかけての高度経済成長にともなう急激な都市化は、公園・緑化行政にとっては、冬の時代であったと考えられる。

都市緑化の重要性が全国的にクローズアップされ始めたのは、昭和40年代末期である。高度経済成長の終焉、自然破壊への反省、生活のゆとりと余暇時間の増大によって、人々は生活環境の改善を緑に求めた。

昭和47年（1972）の「都市公園等整備緊急措置法」の公布と、「第1次都市公園等整備5カ年計画」のスタート、並びに昭和45年（1970）の「風致地区内の建築規制に関する政令の制定」と昭和48年（1973）の「都市緑地保全法」の公布は、都市緑化における整備と保全の2本柱の施策の重要性を確立し、都市緑化の方向性を明確なものとした。

奇しくも昭和47年、福岡市は政令指定都市に指定され、「緑と人間味豊かな都市づくり」を市政方針に決定し、本格的な「緑の指定都市づくり」に着手した。この結果、昭和48年に「福岡市緑化対策要綱」を策定し、続いて昭和49年には「福岡市緑地保全と緑化推進に関する条例」を制定し、緑化協定地区、緑地保全地区、保存樹などの指定に乗り出した。

また、昭和52年（1977）には全国に先駆けて「第1次福岡市緑地保全・緑化推進基本計画」を策定するとともに、昭和54年（1979）には「緑のマスタープラン」を策定し、全国初の都市緑化植物園、国営・海の中道海浜公園、第45回国体会場となった東平尾公園などの大規模公園の整備、緑のプロムナード事業等による街路緑化の推進、百万本植樹運動等による民有地緑化の推進、緑地保全地区の指定と公有地化の促進など、本市の公園・緑化行政は昭和50年代に飛躍的な成長を遂げた。それら一連の施策が総合的に評価され、昭和58年には、「第3回緑の都市賞・内閣総理大臣賞」を受賞した。

近年、地球規模での環境問題がクローズアップされるようになり、環境問題に対する人々の関心が高まる中で都市における緑化行政は新しい局面を迎えている。

福岡市は、平成2年（1990）には「緑の国際文化都市づくり」を目指した「第2次緑地保全・緑化推進基本計画」を策定し、緑地保全・公園緑地整備・緑化推進・緑の育成・緑意識の高揚など5つの施策の体系に基づいて、

個性的で美しい都市の形成を目指し、市域全体を通じて秩序ある緑を創造してゆくため、総合的な公園・緑化行政を展開している。

3 独自性の展開

前項の沿革で説明したように、全国の主要都市における都市緑化の歴史は共通点が多い。それは、わが国の公園・緑化行政が、太政官布達にはじまり、都市公園法等の法律や都市公園等整備5カ年計画に代表される国の制度を中心として展開してきたためで、当然のことといえるであろう。

しかし、中央指導型の施策の展開にもかかわらず、昭和50年代以降、各地方都市は地域らしさの表現、独自性の展開に腐心し、力を注いできた。福岡市も例外ではない。地方分権や地方の独自性が強く叫ばれる現在において、風土に根ざした個性豊かなまちづくり・ランドスケープの創造は、公園・緑化行政の最も重要なテーマと考えている。

個性的なまちづくりの展開には、その地方の風土・歴史及び、創ろうとする努力が深く関与している。そしてこのまちづくりに、公園・緑化行政、及びランドスケープアーキテクトの果たす役割は非常に大きい。街の個性＝街の景観と言っても過言でないからである。

福岡市の気候は暖帯・山陰気候区の西端に位置する。九州のイメージからすると亜熱帯に近い温暖多雨な気候と植生をイメージする人も多いと思うが、裏日本型気候が多少混じっており、宮崎・鹿児島とはかなり異なっている。福岡市の植生は、基本的にはヤブツバキ、クスノキ、タブノキ、スダジイなどの照葉樹林帯で構成され、代償植生としてマテバシイの萌芽林やアカマツ林、モウソウチク林などが加わっている。

これらの常緑樹のボリューム感は、南にゆくほど大きくなり、森林景観の特色となっている。亜熱帯樹よりは本来はこのイメージこそが九州らしさと言えるのではあるまいか。

そこで、福岡市では、かなり早い時期から常緑樹を街路樹に積極的に取り入れるようになった。市の木をクロガネモチとクスノキとしたのも同様の理由からである。表1をご覧ください、福岡市の街路樹に常緑樹がいかに多用されているかがお分りいただけるであろう。

ホルトノキなどは年中緑を提供し、むしろ鬱蒼とした感じすら与えている。常緑樹・落葉樹をランダムに配植した先進的事例として、福岡市の中心部で昭和50年代初めに整備した「明治通り」の街路樹があるが、福岡市らしいにぎわいが感じられる通りで、夏になるとクマゼミの大合唱が都心部にこだまするのも常緑樹を大量に植えているおかげである。

また、福岡市は、市街地の緑地保全に非常に力を注い

「明治通り」街路樹～常緑樹を多用している

でいる。緑地保全地区は47カ所87.8haで、面積的にはそれほど大きくはないが、その97%が市街化区域内それも中心部に集中的に存在していること、及び積極的な買取り施策を展開していることは本市の特徴である。また、小規模な樹林地を保護するために条例による緑地保全林地区も指定しており、1000～2500㎡の樹林地はこの制度によって保護されている。さらに保存樹も現在1500本を指定しており、平成13年までには指定本数を2000本にすることとしている。参考のために、保存樹も表-2のとおりクスノキ、クロガネモチなどの常緑樹が多く、植生の特徴を表している。

表-1 街路樹種表

	樹種名	本数
1	イチヨウ	6,350
2	ケヤキ	5,387
3	ホルトノキ	5,096
4	クロガネモチ	4,970
5	クスノキ	2,889

表-2 保存樹種表

	樹種名	本数
1	クスノキ	365
2	クロガネモチ	181
3	ムクノキ	127
4	エノキ	113
5	イチヨウ	109

福岡市では毎年市民に対して実施している「市政に関する意識調査」の市民が描く福岡市の将来像について、「自然に恵まれた緑豊かな都市」が毎年第1位であり、しかもその割合は毎年上昇している。また本市の施策に関する長期改善要望についても、自然保護が老人福祉について第2位となっている。これは、福岡市には東京や大阪と違って、まだ保全すべき緑がかなり残っており、市民がそれらの保全をまだあきらめていないことの表れであるし、行政の緑地保全に対する早くからの取り組みが評価され市民意識を喚起したとも考えられる。

歴史とランドスケープも福岡市の街づくりの重要なテーマである。また、国際的な文化都市を目指す福岡市にとって、国際交流のステージとなる美しい個性的な都市づくりがいかに重要であるかは、世界中の国際都市の例をみれば明らかである。

前述した舞鶴公園は福岡城跡にありながら、今日までは運動公園としての性格が強かった。しかし昭和63年に、福岡城よりも古い遺跡である「鴻臚館」が同公園内から出土したことをきっかけとして、福岡市では「舞鶴城址将来構想委員会」を発足し、その答申に基づき、今後、公園の全域における発掘調査を進めながらスポーツ施設を徐々に移転し、20年以上をかけて奈良時代から江戸時代にいたる歴史の変遷を伺い知ることのできる本市のシンボリックな歴史公園として整備する予定である。

市制100周年記念事業の1つとして整備した「大博通りシンボルロード」は、長い歴史と貴重な文化遺産に恵まれた博多にふさわしい“歴史の散歩道”である。南北2000mに及ぶ歩道に並べられた数々のモニュメントは、金印の時代から現代までの博多の歴史をみてふれることができるように整備されている。

また、友泉亭公園や大濠公園の日本庭園は、歴史的には京都の数々の名園には及ばないが、日本庭園の代表的な作庭様式である池泉回遊式を取り入れた両庭園は、我が国の庭園文化を十分に堪能させてくれるものである。

海外からの訪問客にとって最も人気が高いのがこの日本庭園であり、それは福岡らしさや九州らしさもさることながら、国際化を目指す街づくりの視点として日本文化を取り入れることが如何に重要かを物語っているといえよう。

福岡市は「海に開かれたアジアの交流拠点都市」を目指している。まちづくりのテーマは海であり、アジアである。それは平成元年（1989）に開催された「アジア・太平洋博覧会」が大きな転機となった。

人工海浜の整備、ウォーターフロント開発による洋上レストランやフィッシャーマンズワーフ「ベイサイドプレイス」などの整備が盛んになり、海に背を向けた街づくりから、海に開かれた街づくりへの転換が急速に進んでいる。

街づくりにおいてアジアを意識すること、それは過去におけるアジアとの交流の歴史を様々な場面における都市デザインのアイデンティティとしてとらえながら、未来にむかって改めてアジアの一員であることを意識したデザインを発信することである。過去におけるまちづくりも、歴史や風土に根ざしたものであったことは間違いない。しかしそれはむしろ偶然または必然的に歴史や風土に影響を受けたものであることが多かった。そういう意味で歴史や風土を強く意識したまちづくり、及びその歴史や風土から求められた都市像を目指したまちづくりの歴史は、まだ始まったばかりである。多くの建築物、多くの道路、多くの公園などはまだまだ没个性的であるし、無国籍的でもある。しかし、地方の時代の到来が確実に予見される今、福岡市においても、歴史や風土に根ざした個性的なまちづくりは着実に進んでいる。

4 緑の国際文化都市づくり

最後に、福岡市の将来の緑の都市像を紹介しよう。

福岡市は、図-1のように市街地の背後に連なる山地と、東部の海の中道や西部の糸島半島の森林で形づくられる「森の緑地環」、背後の山地から市街地へ突き出した丘陵地で形づくられる「緑の腕」、並びにそれらに加えて新たな緑地として整備が進む博多湾のウォーターフロントの「水際の緑地環」を「緑の骨格」として位置づけている。本市では、これらの緑の骨格を保全・創造しながら市街地のスプロールを制御するとともに、市民の休養やレクリエーションの場として活用を図りたいと考えている。

図-1 福岡市緑の構造図

また、緑の骨格からなる五つの輪「緑の五輪」で囲まれた市街地内の公園緑地や社寺林などを市民の日常的な憩いの場や身近な自然を感じさせてくれる「緑の拠点」としてとらえており、さらにこれを「緑道」や「モール」などで連絡して、緑のネットワークを形成したいと考えている。

緑の腕で5つに区分された市街地は、図-2のようにすべてウォーターフロントで海に開かれており、あたかも市街地を覆った緑のスカーフが風にたなびいているように感じられる。そこで、福岡市では緑の構造形成に向けた施策を「グリーン・スカーフ作戦」と命名した。

また、緑が本来の効用や機能を発揮するためには、適正な管理・育成、ならびに市民の理解と協力が必要である。そのためには市民一人ひとりの緑を愛する心を育成し、官民一体となって愛情を持って緑を管理・育成することが最も重要であると考えている。そこで、精神面での都市緑化思想の普及・啓発を目指した施策を「グリーン・ハート作戦」と命名した。

図-2 グリーン・スカーフ作戦概念図

そして、これらの施策の展開の中で、非自然系の土地利用に関しては、樹木の植栽本数を倍増するとともに、自然系の土地利用に関しては、緑地保全地区や風致地区などの地域地区制度を活用し、保全面積の3倍増を目指すことが、平成13年(2001)を目標年次とした「第2次福岡市緑地保全・緑化推進基本計画」の骨子である。

これからの都市づくりに求められるものは、人間と自然との共存であろう。都市は多様な活動の場であるとともに、潤いとやすらぎのある生活の場でなければならない。このため福岡市では、残された自然を最大限に保全し活用するために、「自然動物公園整備構想」や「油山地域整備構想」など、自然を生かした大規模公園の整備を行ない、海辺や河畔においても水辺の整備・保全を推進することとしている。また、潤いのある都市空間を形成するために季節感あふれる美しい街路樹や花のある街づくりに取り組み、安らぎある生活空間を創造するために広場や小公園などの整備を推進することとしている。

しかし、このようにして整備・保全された様々な緑地や公園も、安全かつ快適に管理されてこそ人々にやすらぎを与えたるものである。

成熟した街路樹は、一方では枯死や倒壊の危険をはらみ始めている。利用者が少なく荒れてしまった公園も存在している。都市の成熟とともに生まれてくるこれら様々な問題に取り組み、解決してこそ、都市における人間と自然との共存が成り立つと福岡市では考えている。

更に、これからの都市は個性的でなければならない。都市の文化や地域性はその都市の歴史や人々の生活と深く関わりながら醸成される。そこで、歴史や地形、風土など長年にわたって培われてきたその土地固有の環境条件を読み取り、街と人々が織りなす界限性を都市緑化に生かすことが今後の課題であろう。

福岡市は、九州の拠点都市として、またアジアへのゲートウェイとして歴史と風土に根ざした都市づくりを展開しながら、美しい、個性豊かな「緑の国際文化都市」を目指している。